

仙台医療センターの院内救急システムの現状と課題について

川 副 友[†] 篠 崎 毅^{*}第77回国立病院総合医学会
2023年10月21日 於 広島

IRYO Vol. 79 No. 2 (94-98) 2025

要 旨

2008年に医療安全全国共同行動～いのちを守るパートナーズ～の行動目標に Rapid Response System (RRS) の導入が掲げられ、同年に国立病院機構仙台医療センターも医療安全全国共同行動に参加していたものの、人的不足などにより RRS 導入には至らなかった。2022年に急性期充実体制加算対象となることに先立って2021年度より RRS として Medical Emergency Team (MET) コールを導入した。MET 体制としては曜日ごとに JNP と担当医師を決めて対応する方式 (JNP + 担当医制度) とした。しかしこの体制を休日および夜間は維持できなかったため、休日および夜間の MET コールには当直医師が対応することで代替とした。また、各種普及活動、持続的な教育、病棟看護師に対して気づきの研修会を開催し、3年目にしようやく MET 要請数が増加してきた。海外と比べるとまだ十分な要請数ではなく、実際に院内急変事案は減少していない。RRS 推進には長期的なロードマップが必要であるとされる。われわれの取り組みと現状、課題と今後の展望を報告する。

キーワード 医療安全全国共同行動, rapid response system (RRS), medical emergency team (MET), 院内急変, 気づきの研修会

はじめに

国立病院機構仙台医療センター（当院）は660床の各機能を有する地域の中核病院である。3次救命救急センター、ドクターヘリ基地病院、脳卒中センター、地域がん診療連携拠点病院、母子医療センター、基幹災害拠点病院などを担っており、重症患者の急性期は6床のICUと24床のHCUで対応して

いる。人員的に救急科・集中治療科医師の24時間365日対応は困難であり、Rapid Response System (RRS) の導入に工夫を要した。RRSは入院患者の急変を防ぐため、予兆の段階でタイムリーに対応するための院内救急システムとして1990年代にオーストラリアから報告¹⁾され、分業の進む欧米では容易に広く普及した。一方でわが国では医療においても縦割り風土が強く RRS は浸透しづらい文化がある。

国立病院機構仙台医療センター 救急科/救命救急センター *循環器内科 副院長 †医師

著者連絡先：川副 友 国立病院機構仙台医療センター 救急科/救命救急センター

〒983-8520 宮城県仙台市宮城野区宮城野2-11-12

e-mail: yu.kawazoe.b7@tohoku.ac.jp

(2024年5月20日受付 2025年2月21日受理)

Current Status and Issues of the In-hospital Emergency System at NHO Sendai Medical Center

Yu Kawazoe and Tsuyoshi Shinozaki

Division of Emergency and Critical Care, NHO Sendai Medical Center

*Department of Cardiovascular Medicine, NHO Sendai Medical Center

(Received May 20, 2024, Accepted Feb. 21, 2025)

Key Words: rapid response system, medical emergency team, sudden change, awareness workshop